

# 英米文化学会会報

1002 Published 6 November 1991 Not for sale

## 【英米文化学会第4回研修会のお知らせ】

日時：平成3年11月16日～17日

場所：「魚浜」 静岡県伊東市宮戸177-8 (Tel 0557-51-0953)

※先にお送りしたプログラムと若干の変更があります。

第一日 総合司会 小野 昌 (城西大学)

開会式 15:00～15:30

開会の辞 英米文化学会会長 勝浦吉雄 (立正大学)

研究発表 15:30～17:30

1. 15:30～

経済の軸象——I. Dreiser の1912年版 The Financier を巡って

発表者 菅原文彦 (目白女子短期大学)

司会 高塚 清 (文京女子短期大学)

2. 16:40～

スキーマを利用したリーディング指導法

発表者 名和雄次郎 (拓殖大学)

司会 堀端 治男 (拓殖大学)

懇親会 18:00～20:00

## 第二日

分科会活動報告 五味田幸夫 (玉川大学)

分科会中間報告

1. 文学関係 相良 英明 (鶴見大学)

2. 英語学・英語教育関係 名和雄次郎 (拓殖大学)

閉会式 10:00

閉会の辞 英米文化学会副会長 深井 宏一 (立正大学)

参加費用 9,000円 (宿泊代及び懇親会費) 当日現地にてお支払いください。

英米文化学会第4回研修会事務局

〒101 千代田区神田駿河台1-8-13 日本大学歯学部 佐藤研究室 TEL 03-3219-8160

非常勤時代、某大学に、“Elizabeth I was a great statesman.”を「エリザベス、私は偉大な政治家だった」と訳した学生がいて驚いた。今でも珍訳・迷訳にお目にかかることが少なくないが、こちらも幾度か誤訳をしたにきまっているので、学生の実力を笑えない。長年教えていると、意味が不明な言い回しにぶつかって、はたと困ることが少なくない。いろんな辞書・事典に当たってみてもわからない時など、自分の力不足がやりきれない。外国人の先生に尋ねばすぐに疑問氷解なのだろうがいちいち尋ねるわけにもいかないし、だいいち悔しい。講読用のテキストなどについている日本語注釈もあまりあてにならない、どうでもいい説明はくどくどとついているのに、本当にわかりにくい箇所には注がないのが普通だから。教材出版社か注の担当者にそれぞれ方針があって、それによって注釈ができるのだろうが、詳しくすぎるか簡単すぎるかのどちらかだ。詳しくすぎると、教室で教師の出る幕がない——注を見れば熟語や構文、固有名詞などなんでもわかる（はず）。この手の本は学生に買わせて自学自習をさせるのがいいかもしれない。逆に、注が少なくても物足りない。こればかりの説明でこの値段なら、原書の方がよほど安いのにと思う。が、ないよりはまし——下調べの時間が少し助かるから。しかし、学生にはいい迷惑だろう。注の多寡の塩梅は厄介な問題だろうが、本を使う側の身になって、せめてもうちょっと工夫がほしい。並の辞書で見つかる語釈はいらぬ。全然ミスのない注釈を求めるのも無理な相談かもしれないが、その人でなければできない注釈を期待したい。

研究用の本を読むときにはわからないことがあっても仕方ないとはおっておくが、授業用のときにはそうもいかないのもかく手は尽くす。それでも不明な箇所があれば万事休す、学生に「ここはわからない」と言う外はない。こちらで全力を上げたのだからどうしようもない、学生の寛容に甘えるばかりだ。ただ、「全力を上げた」といっても、手持ちの辞書類を全部調べるわけではない。どんな辞書でも万能ではないし、また、その都度全部を動員していたのでは時間が不経済で下読みがはかどらない。だから、いい加減（でたがめの意味に取られると困るが）で授業準備を打ち切らざるをえない。しかし、教室では、こちらにわからないところははっきりと言う。妙な見栄をはって、嘘やこじつけを弄するのは愚の骨頂と心得ている。もっとも、さっぱりわからないと言うのも癪なので、「これは〇〇の意味であろうと思われる」ぐらいは言うことの方が多い。

このように心もとない授業を続けていると、他の先生方の授業法、特に講読の扱い方を是非お尋ねしたいと思う。きつと、誤訳など皆無で、変化に富んで、学生に居眠りの余地など生まれない授業をされているに違いない。毎回、何を尋ねられてもこわくない用意万端の意気込みで教室に向かいたい。ただ、故中野好夫氏が、『人間の絆』を改訳されたとき、「よくもこうつまらない誤りばかり数多くやっていたものだ」と驚かれたと書かれている（『英文学夜ばなし』）のを見たときにはほっとした。ともかく、自分の知力で、及ばずながらも精一杯努力した結果の誤訳なら許されると思いたい。悩みの種は、誤訳の恐ればかりではない。時には、読んだこともない作家を、さも知っているようなふりをしなければいけないこともあって、これが辛い。原書で読んだ作品などごくわずかだから、文学史や事典で拾った借り物の知識の紹介にすぎない。しかも、学生には原書尊重を説くのだから、情けない話だ。学生時代に翻訳で文学作品をかなり読んだので、これが今になって役立っている気もするが、これからは、原書の守備範囲を広げて、英文学概論などもっと面白い講義にしたいと思う。

【事務局からのお知らせ】

会員の動き

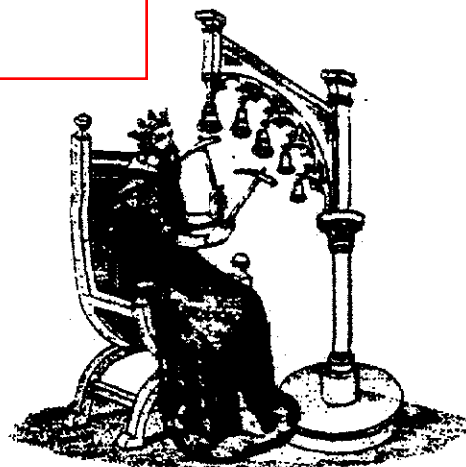
〈住所の訂正〉

馬嶋治男先生の郵便番号 164-165

お手元の住所録を御訂正ください。お詫びして訂正します。

〈転居〉

〈新入会員〉



〈勤務先変更〉

高取 清 文教女子短期大学へ  
新妻 宏 東村山高等学校へ

〈退会〉

鈴木理成 病気の為退会 平成3年10月



*Museo*

〈出版〉

石田雅近 『パラグラフの読解と構成』 (共著) 朝日出版社  
古澤寛行 Vocabulary Building: Advanced Course (共著)  
古澤寛行 Vocabulary Building: Intermediate Course (共著)  
平良達夫 Standard English Grammar (共著) 桐原書店  
八村伸一 Studies in English Usage and Education and an Inspection Tour Sketch (英語論文集) Iseki Publishing House, Tokushima, Japan  
宮本正和 『時の海を越えて——リアの悟り』 (単著)  
吉田真理子 『アメリカ英語の発音教本』 (共著)

※著書を出版なされた方はぜひ学会に一部寄贈してください。寄贈先は、学術委員会委員長 (深井宏一) 宛てにお願いします。

【分科会委員会からのお知らせ】

《分科会からの報告》（吉田俊実）

はじめての分科会準備会が10月19日午後3時より喫茶室『滝沢』にて開催されました。

「文学と性」、「文学と犯罪」、「文学批評」の分科会に参加の意思表示をなされた会員のなかから、当日ご都合のつく方にお集まりいただき、事務局から佐藤先生、分科会委員として秋山先生を加えて、活発な意見交換が行われました。また、共同翻訳、あるいは共同研究の対象としたい参考文献もご持参いただきました。

盛んな議論のうちに、以下の事項が決定・確認されましたのでご報告いたします。

- ◆ 分科会の名称を「第一分科会」とする。
- ◆ まとめ役として「代表」をおき、記録係をきめる。  
分科会会員のおしみなない協力を前提として、「代表」を相良先生にお引き受けいただく。記録係を吉田俊実をお願いする。
- ◆ 分科会の活動目標を、最終的には共同研究執筆、共同翻訳などにおきたいが、会員それぞれの専門分野の相違や興味の対象に微妙な違いがみられるので、十分な意見調整期間が必要という点で全員が一致した。  
したがって、当面の活動としては、会員相互の意見調整のため、分科会で研究したいテーマについての、あるいは翻訳したい本などをおのおの持ちよって、十分な、幅広い議論、情報交換を重ねることを確認。その議論を通じて、自然発生的に興味を同じくする会員がまとまり、さらに共同執筆へ、共同翻訳への道が開かれることを期待したい。
- ◆ 次回会合予定 12月8日（日）午後3時より  
「滝沢」（新宿中央口）にて
- ◆ 出席者  
秋山廣三、君塚淳一、巖川啓介、小林弘、五味田幸夫、相良英明、佐藤治夫、須田理恵、宮崎教子、吉田俊実



編集発行 英米文化学会編集委員会  
池田広子、相良英明、中村豪、宮崎教子、宮本正和、山根正弘  
発行責任者 〒158 世田谷区深沢2-4-9 相良英明